

第15回生涯学習センター運営協議会

〔日 時〕2013年6月24日（月）10:00～12:00

〔場 所〕生涯学習センター 学習室2

〔出席者〕※敬称略

委員：石川 清（会長）、小川 久江（副会長）、天利 公一、岩本 陽児、押村 宙枝、川島 演、
黒田 純子、佐合 昭浩、竹葉 かほる、辰巳 厚子、富川 尚子、中村 香、
西原 要四郎、柳沼 恵一
以上 14名

事務局：熊田センター長、外川担当課長、松田事業係長、村田担当係長、丸山主事（記録）

〔欠席者〕なし

〔傍聴人〕2人

〔資 料〕・第15回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・第13回生涯学習センター運営協議会 事業評価シート意見
- ・2013年度生涯学習センター事業企画書兼事業評価シート 資料1～23
- ・2012年度生涯学習センター事業企画書兼事業評価シート 報告1～7
- ・センター長報告

<協議事項>

1. 生涯学習推進計画の個別施策について

→ 次回以降、協議を行う。

2. 2013年度生涯学習センター事業の企画について

（1）ボランティアバンク1日体験講座（資料1）について説明。

（質問・意見）

特になし

（2）浴衣着付け教室～ゆかたで花火を見に行こう！～（資料2）について説明。

（質問・意見）

会 長：会場はどこか。

事務局：生涯学習センターの和室で行う。

会 長：前回より後退したとはどういうことか。

事務局：生涯学習センターは公的な社会教育機関であるので、基本的には講師の方は市民で活躍している方に来ていただくのが理想であるが、今回は企業の営業で活躍している方にお任せした。

委 員：女性限定だが、若い男性も浴衣は着る。和室は2部屋あるので、男性・女性に分けて着付け教室を開いてもいいのではないか。

事務局：来年度以降の参考にさせていただく。

委 員：若い方を生涯学習センターに呼びたいという気持ちはわかる。しかし、それをもう一度問い直すことも必要だと感じる。浴衣の着付け教室で20名程度を呼んだところで、それが本当に若い人を生涯学習センターに呼ぶことになるのか疑問である。もっと循環していくのであれば、若い人に着物の着付けを学んでもらって、その人たちが同じ世代の人を着付けていってというように広がっていくのであれば、浴衣の着付けで若い人を呼ぶ意味があると思うが、その辺の工夫が必要だと思う。

委 員：ボランティアバンクに浴衣の着付けができる方は登録されているか。

事務局：いない。

委 員：講師はボランティアバンクに登録されている方にしてもらいたいと思う。浴衣の着付け教室

はよみうり文化センターやNHK文化センター等でも行っている。そういうところで、ボランティアで着付けをしてくれる人もいると思う。講師をボランティア登録者の中から選択されるといいと思う。

委員：ポスターやチラシは109の浴衣売り場で掲示、配布してもらえるのか。それができれば生涯学習センターを若い人にも周知できると思う。実際に講座に来てもらえなくても若い人の目に触れるという点では効果があると思う。

委員：浴衣のレンタルが可能か検討中とあるが、企業の営利に関わると良くない。そういうことも含めて検討されているのか。事業コストの内訳は何か。

事務局：会場費や職員の人件費が含まれる。

委員：営利活動の面はどうか。

事務局：それも含めた検討になる。今回はセンタービルの活性化ということも大きな目標になる。

(3) 平和祈念展（資料3～9）について説明。

（意見・質問）

委員：教育委員会へはどの程度まで報告されるのか。このまま事業評価シートを出すわけではないと思うが、参考までに教えていただきたい。

事務局：平和祈念展に限らず、生涯学習センターで行う事業については教育委員会へ報告している。平和祈念展についても次回の教育委員会で報告をすることになっている。主に目的や事業の内容を報告する。市全体をみても平和関連の事業を行っている部署はない。

委員：資料8について、昨年度は夜間に開催され、決して参加人数は少なくはなかったと思う。前年はB評価であり、その理由として参加者が少なかったとある。今回は小学生以上を対象としているが、反省を踏まえ今年度はどう変えたのか。

事務局：今回は日曜日の午後に行うので、集客が見込めるのではないかと考えている。

委員：テーマも少し子ども向けにしたと思う。

事務局：わかりやすいお話をさせていただく。

委員：4、5年前に各学校を回り、広島悲劇について伝える活動をしていた。平和祈念展では、町友会が中心になって動いていると思うが、この団体はボランティアバンクに登録しているか。

事務局：町友会としてボランティア登録はしていない。

(4) 新撰組結成150年記念「土方歳三の書簡からみる人間像」講演会（資料10）について説明。

（意見・質問）

会長：前年度の評価がBであるが、企画は同じものか。

事務局：別の企画になる。

事務局：昨年は川口氏である。市の文化財の学芸員の方の話だった。

副会長：現在、「八重の桜」が放映されているので、的を射たテーマだと思う。

委員：後にある事業報告では、まちだ雑学大学との共催の方法について課題が挙げられている。その点をどう考えているのか。最初に総会があり、後半の講演会も総会に参加された会員の方が大部分を占めている印象を受けた。定員を満たしていなかったのも、一般の人が入る余地がなかったわけではないと思うが、共催をする場合に、そういった団体の独自の集まりの会と講演会とを合わせて行うのは団体側の都合だと思う。その辺の対応はどうか。

事務局：講演の内容によっては一般の方に聞いていただきたい内容がある。その場合はホールで150人規模の講演会にし、打ち合わせながら内容を組み立てている。まちだ雑学大学、地方史研究会、史考会などの団体が講演会を行う場合、一般の方も参加できるような内容であれば一緒にやっていきたいと思う。一般の方が入りにくいという課題があるので、一旦総会を解散して、30分ほど時間を空けてから一般向けの講演会を開くという形をとっている。

会長：募集定員が110名であるが、40名は会員の方ということか。

事務局：そうである。

(5) 夏休み子どもフェア(資料11)について説明。

(意見・質問)

- 委員：昨年の反省として、人気のあるものは早々に終わってしまって、わざわざ来たのに参加できない状況だった。今年、その対策はどう考えているのか。
- 事務局：昨年は1500人という非常に多くの方に参加していただいた。混乱が生じたことも事実である。前年との違い及び改善点は、ジャンル分けをしたことである。具体的な方法については検討していくが、原則は各ジャンル1つを体験していただく。例えば、名人のジャンルで新聞を作ったら、次は工作のほうへ誘導するといったことを考えている。
- 会長：各ジャンル1つのみで、違うジャンルに移ってもらうということか。そのすみ分けを混乱の中でできるのか。
- 事務局：例えば、スタンプラリーの形を考えている。ジャンル分けのほかには、事前申し込み、整理券、自由参加といった参加の幅を持たせることで混雑解消を考えていきたいと思っている。
- 委員：強制的に子どもをばらけさせる方法として、スタンプラリーをビンゴみたいにするのはどうか。ビンゴは乱数になっているので、ビンゴをしたければ、嫌でも移動しなければならない。自動的にばらけさせることができる。景品はあるのか。
- 事務局：ビンゴはいい案だと思う。検討させていただく。景品は国体推進課から、国体関係の品を考えている。
- 委員：周知方法として、チラシを各学校に配布すれば、たくさん子ども達が来てくれる可能性がある。チラシの配布はどのようなレベルで考えているか。
- 事務局：児童青少年課で配布する「夏休み子どもフェア」というリーフレットに掲載している。小学生全員に配布される。
- 事務局：前年度は手違いがあり、このリーフレットに掲載されなかった。別刷りにしてリーフレットに挟んで配布した。そのため反響が大きかったと思っている。事前申込みをせずに自由参加にすると、人数の多いところは参加できなかったという状況だったので、応募が多くなりそうなところは整理券や事前申込み制で対応したい。
- 委員：チラシを全員に配ることができれば、その反応は大きいと思う。大勢の方が来られると大混乱が生じる事態になりかねず、整理券配布にするとせっかく来たのに参加できないことが出てくると思う。
- 委員：もし、今年の平和祈念展の参加者が少なかったとき、来年は別刷りで「夏休み子どもフェア」リーフレットと一緒にチラシを配布するという手もある。
- 委員：ボランティアコーディネーターは小学校の中・高学年生に戦争体験を聞いてもらう企画を考えている。平和祈念展のチラシを配布すれば、相当な方が観にくると思う。私はB29の爆撃や焼夷弾が落ちる中を、祖母に手を引かれて逃げた記憶がある。そういう話を体験談として話してほしいと依頼された。チラシを学校へ配ることは有効な手段だと思う。

(6) 乳幼児を持つ保護者のための講座「仲間とつくる わくわく子育て」(資料12)について説明。

(意見・質問)

- 委員：講座の内容はいいと思う。次の手立てとして、受講した人からさらに広げていくようなことは考えているのか。
- 事務局：来年度に他の事業との連携やきしゃポップ事業とのリンクを考えている。講座で受けたことを題材にして、来年度の講座の手伝いができるようにしていきたい。自主保育の講座を入れているのは、そういう方向で考えているからである。東京都ではこういった事業で担い手を育てても、自分の子育てが終わると仕事をする等の理由でなかなか定着しないという問題がある。担い手に繋がるように考えていきたい。講座の最後にまとめや交流会、グループ化の話ができればと考えている。
- 会長：前はどのくらいの応募者がいたのか。
- 事務局：全8回の講座で、募集定員は20名だった。応募された方は36名。受講率は84%だった。
- 委員：1, 2歳児の子を持つお母さんは自分のことだとしても真剣になると思うが、自分の子どもがいつ熱を出すかわからない状況の中、他人の子どもの面倒まで見ていられないと思う。子ども

が3, 4歳になっても、1, 2歳の子を持つお母さんの世話をしようという状況ではとてもない。小学生の子を持つお母さんであれば、子どもが帰ってくるまでの時間、例えば、午前中は手が空いているからご近所にいるお母さんの世話をしようという余裕が少し出る。子どもが中学生になると働きに出てしまう。自分の子どものことでいっぱいになっている人に次の広がりや地域での活躍はあまり期待できない。面倒を見ることができる年代は誰かを考えて、そういう人向けに講座を開いて、ゆとりのある方をターゲットにするほうがいいと思う。

副会長：高齢者にならないと難しい。子どもの手助けをできる人は還暦に近い、50代の方だと思う。現実に子育てをしている方は自分の子育てで手いっぱいである。

委員：出前講座をして、地域で講座をする考えはないのか。

事務局：今のところ地域で行う余裕はない。

委員：指摘された問題は解消されないと思う。子どもを抱えている事情はいろいろとある。

事務局：他の子を完全に保育することを求めているわけではない。ここで学んだ知識や考え方を次に繋げていただければという話である。乳幼児だけではなく、幼児や小学生、中学生の子を持つ親の講座もある。他にも、きしゃポップ事業、家庭教育支援学級といった事業全体で担い手づくりをしていこうと思っている。今回の企画はその中の一つである。ここを特化して、乳幼児講座の参加者だけに担い手になってもらいたいという話ではない。

委員：乳幼児を持つ母親が子育てで孤立しないように、乳幼児の状況を学んで友達ができればいいという程度にしておいて、人材育成や子育てサークルの立ち上げは余裕のある方にしてもらいたいと思う。3歳児くらいの子を持つお母さんは、自分の子どもを他の子どもと遊ばせたいという気持ちが強いので、保育園に行く前の1年間は子育てサークルに参加すると思う。そういう講座は別に考え、それらを相互にリンクさせていくほうがいいと思う。

委員：次の手立てとしてのイメージは、担い手というイメージではない。小さい子どもがいる、部屋に閉じこもりがちなお母さんたちが自主的に地域で集まって、愚痴でも子どもの悩みでもいいので、お母さん同士が交流できる場が作られればいいと思う。別に勉強をしなくてもいいと思う。そういう場づくりのステップにならないかと思った。

事務局：東京都が考えている担い手はそういったものを全て含めている。地域で集まって何か活動をしていくことに繋げていければいい。

委員：高齢者の在宅医療は逆の考えである。往診に来てもらいたいけれどなかなか来ない。高齢者介護に関しても同じである。

委員：自分が学習したことを地域に還元することはどの事業にも言えることだと思う。もし本当に地域での活躍を期待するのであれば、出前講座を地域で行うべきだと思う。生涯学習センターで講座を開くと、さまざまな場所から人が来る。自分の地域に帰って、一人で核となって活動することは無理がある。たまたま3, 4人が同じ地域の人であれば、その人たちが中心となってサークルを作ったり、地域のお母さん達とお茶飲みをする場を作ったりして、次に繋がっていくかもしれないが、生涯学習センターに20人を集めて、1年講座をただけでは非常に難しいと思う。地域を限定する、持ち回りで講座を行うと地域でも種が撒かれて、子育てを支援するサークルが立ち上がったり、お母さん同士の交流が密になって活動が始まったりすることに繋がっていくのではないかと思う。来年度以降、やり方を考えたほうがいいと思う。

委員：「ばあん」や「つるっこ」等の子どもセンターとコラボして講座ができれば、それぞれの地域に人材を育てることができると思う。身近な施設を知るということも含めて、連携しながら開催すると思う。

委員：申込方法は往復ハガキのみか。若いお母さん達が一番使わない手段を選んでいると思う。往復ハガキはコンビニにはなく、郵便局に行かなければいけない。若い人たちを呼びたいとわりには、未だにこういう手段をとっているのか。行きたいと思っても往復ハガキをわざわざ買いに行ってしまうか疑問である。その辺を考えていただきたいと思う。

事務局：今後検討させていただく。

(7) 市民大学後期講座(資料13～資料23)について説明。

(意見・質問)

委員：開催時間の記載がない。できれば、実施時間を入れていただきたい。どういう時間帯で行うかによって、多少の違いはあると思う。

事務局：郷土史は夜に行っていたが土日に変更した。また、国際学も夜に行くことで若い方にも参加してもらえるようになった。事業評価シート上で時間帯が分かるようにしたいと思う。

委員：毎回、同じ時間か。

事務局：曜日が変わることはあるが、時間はほぼ同じである。

委員：予想しない講師の方が見られる。プログラム委員の尽力のおかげか。どういう交渉をされたのか。

会長：プログラム委員のコンネクションが大きいのか。

事務局：コンネクションだけでなく、プログラム委員自身が勉強してその中で様々な情報を得て、プログラム会議の中で話し合っていて決めている。プログラム委員が交渉してきてくれることもある。一人の一方的な考えにはならない制度になっている。

4. 事業評価について

→ 担当：資料21を中村委員、資料22を竹葉委員、資料23を押村委員

(意見・質問)

会長：資料21について、大学ランキングは河合塾やベネッセ、新聞各社等でも行っている。さまざまなおところがあるので、朝日新聞だけが公平性があるところとは思えないところもある。一社だけに肩入れしないほうがいいと思う。

委員：資料21の期待できる効果について、「大学への理解を深めることにより、町田市内の～」と記述されているが、理解を深めるのは、大学以外の人たちの大学に対する理解を深めるということか。町田市内の大学の地域連携に繋げるという文は大学が主語になっている。どちらを期待しているのかがよく分からない。大学関係者が参加されなければ大学間の地域連携は難しいと思う。何の意図で行われたのかが分かりづらい。

会長：期待できる効果はもっと違うところにあるのではないか。

委員：「大学をどう選ぶか」というタイトルは初めて出てきたと思う。大学をどう選ぶか、高校をどう選ぶか、会社をどう選ぶか等、選ぶシリーズはたくさんある。

事務局：大学って何だろうということから始まった。朝日新聞ではさまざまな大学を紹介している。大学ランキングの編集長をしている中村氏がそのコラムを書いていた。社会的に大学のあり方とは何か、就職のための大学なのかとさまざまな疑問があり、市民も同じような疑問を持っている方もいるだろうということで、時事問題として取り上げた。どの大学を選ぶのがいいということではなく、社会的に大学のあり方はどうかということを取り上げたいと思った。大学は大きく、就職問題や進学問題等さまざまな課題があり、位置づけがさまざまある。今回、聞いてほしい方に周知が行き届かなかった。また同様の内容の講座を企画するときは、テーマを絞り込む必要があると思っている。

委員：大学はいろいろな意味で注目されている。生涯学習センターの講座なので、生涯学習と大学との関係、連携も含めて取り上げたほうが集まりやすいと思う。あまり広げすぎると、受講者はさまざまな期待を持ち、自分の関心のごく一部しか聞けなかったということになるので、やはりここの使命と絡めて考えた方がいいと思う。

委員：大学をどう選ぶかというより、大学をどう使うかという講座にしたら良いと思う。私は大学という社会資本をどう活用できるかを常日頃考えている。例えば、玉川大学ではプラネタリウムを見せてもらえる。自分たちの地域の大学をどうすれば活用できるのか、もう少し実用的な話をしていただけたらいいと思う。もちろん、社会人入学をして講座を受けるという選択もあるが、待っているだけではない使い方もあるという話をしていただけたらありがたいと思う。

委員：大学もさまざまな地域貢献をしたいと思っている。市民が、地域の大学がどんなことを行っているかを知ることができ、大学との接点を作り出すことができるといいと思う。それを地域の

生涯学習センターが担っていただくといいと思う。

副会長：町田の中で大学と市民の交流ができるといいと思う。

委員：資料22、23について、資料22の事業ではまちだ雑学大学との連携が良くでき、資料23の事業では連携が良くできなかったとある。具体的にどこに違いがあったのか。

事務局：集客が得られなかったというところが全く違う。資料22はまちだ雑学大学の会員を含めた人数であるので、一般の方はとても少ない。しかし資料23は講師が著名人ということもあり、一般の方が多かった。記載は一般公募の人数になる。

会長：生涯学習センター事業であるので、生涯学習センターに来た人数をカウントすべきである。別に内訳があってもいいと思う。

事務局：良くできた点は、「タクト一本」（資料23）は準備段階から職員が加わり、共催団体との意思疎通ができていたことである。丁寧な準備がどれくらいできるかによっても評価が変わってきってしまう。

委員：まちだ雑学大学側の関係者は違う方だったのか。

事務局：違う方である。

会長：団体との共催は大いに結構だと思うが、共催のあり方は慎重に、申し合わせのようなことはすべきだと思う。

<報告事項>

1. 事業評価の最終報告

事務局：報告2について、企業の方をお願いした事業である。企業やNPO、大学などの様々なノウハウを持つところと今後も連携していきたいと思っている。企業の場合は営業に繋がらないように慎重にやっていきたい。その他の事業についてはB評価になる。前年踏襲ではなく、内容ややり方を変えながら継続していきたいと思う。参加人数が少なかったり、逆に多すぎてうまく運営ができなかったりときさまざまな状況があるので、一つ一つの事業を総括し、次年度に繋げていきたいと考えている。

2. センター長報告

(1) 教育委員会について

6月10日に開催された。学校開放制度検討委員12名について委嘱及び任命をした。委員会のメンバーは、小・中学校長から各2名、あとの8名は生涯学習部、学校教育部、スポーツ振興課の管理職である。学校開放の推進について、校庭と体育館の貸出方法を変更したいという議題がある。現在は開放委員会が運営をしている。そのやり方を変えたいという内容である。また、2013年度さがまちコンソーシアムの連携事業について報告した。予定している11事業の内容を説明した。次回は7月5日に開催される。3つの報告をする予定である。1つ目は、市民企画講座について。次回詳細を提出する。市民企画講座は募集を締め切った。申請されたのは14講座、その内の5講座を採用した。今年度はあらかじめテーマを決めていて、そのテーマに沿った内容になっている。2つ目は平和祈念展、3つ目は市民大学の後期講座について報告する。

(2) 市議会について

6月11日から17日までの5日間に一般質問があり、18日に質疑が行われた。生涯学習センターに関わる内容はなかった。鶴川駅前図書館や忠生図書館等、新たに業務が始まったところとこれから計画があるところについて質問が出された。19日に文教社会常任委員会が開かれた。

(3) センタービル管理について

6月18日に総会が開催された。このビルはセンタービル管理組合理事会と(株)センタービル取締役会がある。管理組合理事会はビル全体の所有者として、109と生涯学習センター、外向き店舗を総括する組合である。センタービル取締役会は109と生涯学習センターで打ち合わせをする。課題はビルの長期修繕計画である。来年度、7階屋上のメンテナンスの計画を進めている。

(4) 教育プラン・生涯学習推進計画について

6月25日に生涯学習審議会が開催される。その中で審議会から生涯学習のあり方について答申をいただく。この答申の内容を教育プランに取り入れていく。教育プランの中には推進計画の内容が網羅されているので、推進計画の具体的なアクションプランをこれからつめていきたい。

(5) 今後の予定について

6月25日の夜間に生涯学習センター職員を対象にした研修を行う。広報に掲載する目的や内容等について、広報担当部長から話をいただく。さがまちの社員総会が相模大野のセンターで開催される。社会教育委員の会議が審議会の後に開かれる予定である。ここに事業費補助金の8団体の申請について承認をいただく予定である。この補助事業については今年度で廃止する。講師派遣制度という他の制度があるので、そちらに移行・拡充することを考えている。6月27日に第1回学校開放制度検討委員会を開催する予定である。7月2日に保健対策課で行っている引きこもり対策についての協議をする予定である。保健対策課では食育事業と自殺防止事業も行っていて、生涯学習センター職員もプロジェクトに入っている。7月4日に点検評価会議が開催される。生涯学習ボランティアバンク制度の現状と今後の展開についてアドバイザーの方から意見をいただく。7月21日に参議院議員選挙が行われる。現在、ビルの外壁に生涯学習センターのポスターを掲示できるように、4か所にパネルを設置した。人通りが多い東急側にもポスターパネルの設置ができるように交渉している。

(意見・質問)

委員：学校開放制度検討委員にユーザーが一人も入っていないことがショックである。学校開放団体や学校開放委員の委員長や指導員等から意見や要望を聞く機会はないのか。

事務局：学校開放条例の改正をするための会議になる。12月議会に条例改正について提出する予定である。スポーツ振興課が所管となり、団体へは学校ごとに個別に説明会をする予定である。5校についてクラブハウスを建てる計画がある。学校開放制度検討委員会は庁内においてどのような課題があるのか話をするところである。部外者の方は入っていない。

委員：市民企画講座の内容を運協の場に出してほしいという要望が前回の会議であったと思う。

事務局：今回は間に合わなかった。事業評価シートとして提示したいと考えている。次回には提示したい。地域活動から1講座、子育て支援から1講座、高齢期から2講座、時事問題から1講座ある。詳細は団体と打ち合わせしながら作っている。

会長：何が採用されたかではなく、14講座を選ぶときにどう決めたのかということだと思う。

委員：応募してきた企画を全部見せていただきたい。採用された5講座だけではなく、どういったものがエントリーされて、どういう内容だったのかを知りたい。不採用の中には良い企画もあるかもしれない。そういうことを提案するのもこの会議の役目だと思う。応募するときの申請書の写しを出していただいてもいい。

事務局：決め方の原則は、各テーマから1講座を選ぶ。センター長と担当職員間でやりとりをしながら、生涯学習センターとして決裁をあげている。それをこの場で協議するとなると時間もかかり、問題もある。企画書は職員が団体とヒアリングをしながら生涯学習センターとして採用している。この場に提出するかについては検討させていただきたい。

委員：決定したことに対して変更してほしいということは全くない。生涯学習センターが決めたことは尊重したいと思っている。不採用の企画の中にも、もう少し方法を変えたらいい講座になるものがあるかもしれない。そういったものを市民企画講座以外で、例えば、共催という形で流用することもできる。そういう活用方法もあると思う。以前、市民企画講座では落ちたが、共催講座として実施したものもある。良い企画であれば無駄にしたくない。

4. 東京都公民館連絡協議会の活動について

【役員会】

委員：7月25日に開催予定である。12市1町しか加盟していない都公連に関して、もっと拡大した機会を作ろうということで、嘆願を東京都の教育委員会へ提出している。

【委員部会】

委員：6月13日に第2回委員部会運営委員会が開催された。第1回研修会の日程、講演会内容が第一の議題であった。日にちは8月24日（土）、時間は未定である。全体会が非常に形式的になりすぎているので、挨拶程度のものにして講演会をメインにしたほうがいいとの案が提案された。上部部会の役員会に諮った上で決定することになった。講演会は2時間を予定している。講師は日本体育大学の上田幸夫先生。西東京市公運審委員も務めている。テーマは「三多摩における公運審委員の役割と課題」。この先生は東日本大震災の被災地における公民館を核としたコミュニティづくりにも参加されているので、災害地における公民館の役割、あるいはそれに向けての公民館づくりという観点からお話をいただく。第2回、第3回のテーマについて意見をいただきたい。次回の7月11日に協議をするので、何かとりあげてほしいテーマがあれば意見をお願いしたい。

→ 依頼状、例示をメールで送信する。意見提出は7月10日まで。

5. その他

事務局：家庭教育支援事業補助金の正式申請をした。方向性は前回提示したとおりである。

現在、来年度の申請の受付がきている。できれば地域に広げていく形で、長期的な考えを持って事業を実施できればと考えている。

市内の未来づくりプロジェクトチームに参加している。社会福祉協議会と学校支援センターの3者が集まる。年4回の会議を予定している。連携をとりながら進めていきたい。7月2日に第1回会議が行われる。

委員：7月12日（金）に日本と韓国との図書館交流を川崎市中原図書館で図書館シンポジウムが行われる。大震災から今日における図書館の役割を考えるという主旨である。8月3、4、5日に社会教育全国集会が行われる。去年は、高知で500人規模の集会であった。今回は千葉大学がポストになる。様々な課題を共有している社教委員や地方の委員、職員の方が参加される。別途メールでご案内を送信する。

次回以降の生涯学習センター運営協議会開催日について

7月29日（月）午前10時から12時 学習室2